

プロローグ

## 車窓の風

私は1人電車に揺られていました。

学生時代の制服を着て、小さな鞆一つを抱えて。なかにはハンカチ、ちり紙、小さな手鏡、つげの櫛、祖母からもらった健康のお守り、歯ブラシ、お財布……。

「これじゃ、まるで一泊旅行に行くみたいじゃないの」

そうつぶやいたとき、思わず笑ってしまいました。なぜなら、この鞆に入っているものが、このときの私の全財産でしたから。

若葉が芽吹き、木々の緑が目眩しくちらつき始めた頃でした。やわらかな春が過ぎて、体を動かすと少し汗ばむくらい、爽やかで気持ちのいい季節です。

そんな夏のはじめ、私は夫である虎彦とらひこさんのいる場所に向かっているとこゝろでした。3カ月ほど前から、ワケあって別々に暮らしていたのですが、そんな状況に我慢ができなくなつたのです。

行き先は栃木県の鬼怒川温泉。温泉なんていうと、やっぱり旅行なのかと思われるかもしれませんが、残念ながらそうではありません。もしも、これが単なる旅行であつたのなら、どれほど嬉しかつたことでしょう。でも、決してそういう明るい理由ではありませんでした。

私は、夜逃げ同然で出て行つた夫を追いかけてきたのです。

ガタン、タン。

車内は乗客の熱気で蒸し蒸しとしていました。鞆からハンカチを取り出し、額の汗を拭い、首筋をそつと押さえました。

「あんなもの全然役に立たないわ」

天井についている扇風機が小さくうなりを上げて回っています。微々たる風は通路に立っている乗客に遮られ、私にはほとんど届きません。そのイライラが、ますます

暑さを感じさせます。

私が座っていたのは2人がけの座席が向き合うボックスシートの際です。

斜め前に目をやると、年配の男性が大きな風呂敷包みを膝の上に抱えています。何が入っているのかしら。野菜や果物？ でも青果特有の甘い香りはしないし、柔らかそうだから木綿や絹を売っている業者さんね。目の前に座っているご婦人は、素敵な洋服を着こなしているし、ほのかに優しい香りを漂わせているから、きつといいところに嫁いだ女性なんだわ。

と、長時間の移動でジンジンするお尻の痛みをまぎらわすために、想像を巡らせながら過ごすのはなかなか楽しいものです。

こんなことを考えていると知れば、祖母から「のんきなことを言っ、おまえはまったく」と叱られるかもしれません。そう思っ、また私はおかしくなりました。

たしかに夫が夜逃げしたという事実からすれば、とんでもなく悲惨な状況です。

お金はありませんし、住むところがなくなっ、知っている人が誰もいない鬼怒川温泉まで逃げるようになったのですから、これからどうなるのだろうかと不安

にならないことはありません。

でも正直なところ、自分が置かれている状況をそれほど悲観してはいませんでした。学校を卒業してすぐに嫁入りした私は、右も左も分からない世間知らずでしたし、そもそも物事を深く考えることが得意ではありませんでしたから。私のまわりで何か大変なことが起こっている、くらいの気持ちでその状況を軽く眺めていたような気がします。

もちろん、ことの次第はきちんと理解していたつもりです。

和菓子屋を営んでいた虎彦さんの借金がかさみ、家も財産もすべてを失うことになったこと。そのせいで私は家族と離ればなれになって縁のない場所ですら暮らすことになったことも。そして、根本的な原因が、夫が、饅頭をこしらえるための機械づくりにのめり込んだためであることも、頭ではきちんと分かっています。

分かっていたいなかったことといえば、饅頭をこしらえるための機械をつくること、どれほど困難で険しい道であるのかということ。

でも、これに関して言えば虎彦さん以外の誰もかきちんと理解してはいなかったろうと思います。これまで誰も成功することのなかった、誰も見たことのない新しい機

械をつくろうとしていたのですから、分からなくても無理のないことです。

人は虎彦さんのことを饅頭狂いと噂しました。おもちや、づくりののめり込んだぼんくら亭主と言われたこともあります。

それでも私は、饅頭に対する彼の思いを知っていましたし、実際に虎彦さんがつくってお饅頭のおいしさに心底惚れ込んでいましたから、虎彦さんのやっていることは正しいとまごうことなく信じていました。

夜逃げという結果になってしまったにせよ、饅頭の機械をつくりたいと願う虎彦さんに対して、決して間違ったことはしていないという根拠のない確信のようなものさえありました。

静かに太陽が暮れていきます。群青色の空に、淡黄色に輝くまん丸のお月さまがぼっかり浮かんでるのが見えました。

「月がとっても青いから、遠回りして帰ろう」(JASRAC出 1905082-901号)

ふと流行歌が口をつき、私は思わずはっとしました。

自分が悲しんでいるというより、むしろ、今まで出たことのない世界へと踏み出そ

うとする興奮のようなものが胸のうちにあることに気づいたのです。

「私ったら……」

家族の顔が思い浮かびました。

「みんな、どうしているかな」

考えてみたら、家族のいない町で暮らすのははじめて。

今から行く場所にはおばあちゃんもお母さんも、お姉ちゃんもいない。まわりを見渡してみても、知っている顔はない。みな目をつぶって眠っているか、考えごとをしているのか、黙ったまま静かに座っています。聞こえるのは電車がただひたすら走る音だけ。窓の外には、知らない景色がものすごい速さで流れては消えていきます。

私は一体何をしているのかしら。私の人生は、このままどこへ向かおうとしているのか。

もしかしたら薄暗い場所へと入り込んでしまうことになるんじゃないかしら……。

急に前方に座っていたランニング姿のおじさんが立ち上がり、

「こう暑いと、やっけてらんねえな」

そう言いながら、引き上げ式の窓のつまみをつかんで、閉まっていた窓を開けよう  
としました。ガタガタ、ガタガタ。

「ちくしょう、なんで開かねんだ」

ガタガタ、ガタ、ガタツ。何度目のチャレンジだったでしょう。窓が開き、風が一  
気に流れ込みました。爽やかな風は乗客の間を駆け抜け、私のところにも。

「ああ、気持ちいい」

これから始まる夏の香りが、汗ばんだ額や頬をなでつけていきます。私の中の重い  
気分を洗い流してくれるかのように、強く、優しく。

私は目をつむり、その心地いい空気を思いきり吸い込みました。

吸って吐いて、もう一度吸っては吐いて。深く、深く。曇ってしまった脳みその奥  
のほうにまで新鮮な空気を届けるような気持ちで、深呼吸を繰り返しました。

「ああ、早く。あの人のつくったお饅頭が食べたい」